

●論説文コンクール講評・2023年（森）

今年の論説文の課題テーマは①「30歳の自分」が生きる時代②世界がつながるために必要なことの2つでした。①については少子化が進む日本社会で、10数年後の自分がどんな存在になっているか。②については、ロシアとウクライナの紛争が象徴するように「分断」が進む世界の人たちが相互理解を深め、平和につながってゆくための模索を考えてもらうのが、大きな狙いでした。どちらのテーマにも、多くの力作が寄せられ、審査員は最後まで悩みました。コンクールに参加した中高生の、積極的な姿勢に感動しています。

その中で「優秀賞」に選ばれたのが、②を考えた、『『きれいごと』を捨てる』です。この作品のテーマは「多様性」です。国連が定めたSDGs（持続可能な開発のための17の国際目標）は現在、いろんなところで取り上げられていますが、それを実現する際のキーワードとして、よく使われるのが「多様性」。世界には80億人以上の人が暮らしていますが、まさに人間は人それぞれ。お互いの「違い」を認めることが「多様性」とされ、美德とされています。そこに疑義を唱える人はいないでしょう。

しかし、この論者はあえて「みんなが同じ方向を向きがちだが、それは見せかけで、そうは思わないと思う人が排除されることになるのでは」と疑問を呈します。「多様性が大事」であることは否定しないけども、それ以外の異論を許さないような社会になってはいないか。つまり「多様性重視という単一性」のワナに世界は陥っているのではないかという投げかけです。

論説をまとめる時に、こうした逆説的な提言は、読者の意表を突くという狙いでも、効果的です。あまりにも突拍子ない思い付きでは、説得力はありませんが、ここでは「なるほど」とうなずける内容なので、論説文らしい作品としてまとまっていました。

結論は「自分の価値観と異なる存在を認め合うことが重要」となるのですが、あえて注文を付けるとすると、もう少し、具体的な事例がほしかったなと思います。池袋で見たロリータファッションの中年男性の例はありますが、この分野への関心があるのならば、現在、世界で多様性を問うキーワードとなっている「LGBTQ」などについてもう少し話を広げれば、さらに論をまとめる上で、読者への説得力は増したでしょう。世界の中では「均一性」が高いとされる日本社会ですが、異文化や、新しい時代の概念をどう受け入れるかという課題はこれからますます大きくなってゆきます。変化する時代を考えさせられる、興味深い論説文でした。

続いて「奨励賞」に選ばれたのが、①を考えた、「真の『平和』を求めて」でした。30歳になった時の自分のことがテーマなので、身近な夢の話が集まるのかなと思っていましたが、ここでキーワードにしたのは「平和」です。ウクライナ紛争や秋に勃発したパレスチ

ナ紛争をはじめ、世界中で争いごとが続く中で、中高生にも「平和とは」ということを考える人たちが増えているのでしょう。論では「戦争が起きてない日本は平和と考えられがちだが、本当にそうなのか。完全な平和と言えるのだろうか」という問いかけから、論を進めてゆきます。

今の日本には、確かに戦争や紛争はありませんが、社会格差が広がり、「相対的貧困」などの問題は増えています。決して日本は平和とは言いきれない。「平和と非平和の間にはグラデーションがある」として、日本の姿を「消極的平和」と位置づけます。その上で、本当の「平和」になるには解決しなければならない課題も多く、自分が30歳になるころまでに自分は少しでもその方向に近づきたいという主旨で論をまとめました。

今年広島で先進国首脳会議（G7）が開かれ、世界で唯一の戦争被爆国である日本の実相が内外に改めて紹介されました。そこで何かを感じた若者も多かったのではないのでしょうか。今回の作品を機に、もっともっと日本から日本に発信できる「平和」とは何かを考えてみましょう。経験者や関係者の直接の声を聴く機会があれば、さらに関心は高まり、論説文も充実してくるはずです。考えて書くだけでなく、自ら取材する行動力を期待しています。

もう一点。「佳作」に選ばれたのが、②を考えた「他人の靴をはいてみる」でした。学校で先生から教わったという言葉ですが、初めて聞いた人も理解しやすい考えが、この言葉には込められていると思います。著名な作家や哲学者などの言葉は、考えに考え抜かれた上でまとまった言葉なので、論説文を書く際に引用することは、効果的です。自分の考えに沿った名言を見つけ、それを導入剤としてゆけば、説得力のある文章になってきます。ただ、あくまでも他人の言葉ですから、本論は自分の経験や考えを中心にするには忘れないように。

ここでは、夏にカンボジアで子どもたちと触れあったという経験が、論に大きな説得力を持たせる材料になっています。日本では考えられないような教育環境の中で学ぶ子どもたちが世界にいることを知ることで、自分が暮らす日本社会を外から考えることができます。比較という視点は、論説を進める上で、効果的で、説得力もあります。

途上国での経験を題材にする際に気を付けたいのは、日本が一方的に助ける、何かをしてあげるといった視線だけにとどまらないこと。逆に日本の方が途上国から学ぶこともたくさんあります。まさに他人の靴をはいた上で、もう一度、「自分の靴をはき直してみる」。そこで気づいたようなことがあれば、ぜひそこも触れてみてください。文章が生き生きとして、説得力が出てきますよ。